人生100年 健やかに生きる

～体育・スポーツとともに～ (34)

NPO法人 ならスポーツクラブ理事長
北 良夫 (92)

オリンピックが身近に（その1）

「ならっこ」が代表に

第1回近代オリンピックは、1896年アテネで開かれ、今年のパリ大会は33回目となる。1932年の第10回ロサンゼルス大会が開かれた年に筆者は生まれた。近代オリンピック創始者のクーベルタン男爵が、この大会で「オリンピックは勝つことよりも、参加することに意味があるのだ」と述べたことは有名。10回大会に派遣された日本選手団は、16競技に選手130人（内女子16人）、役員60人総勢190人の参加は開催国アメリカに次ぐ陣容、2隻の豪華船で太平洋を渡った。航海日数2週間だった。（参考「毎日新聞発行、昭和のスポーツ史」より）。競技は陸上、水泳、馬術などに大活躍。三段跳びで世界新記録を出して金メダルの南部忠平選手、銅メダルに大島鎌吉選手。棒高跳びで西田修平選手が銀、「暁の超特急」と呼ばれた吉岡隆徳選手が、100㍍が他を寄せ付けず優勝、過去マラソン以外の種目で、金メダルは初めてとなる快挙であった。陸上競技でこれまで期待されていた男子100㍍は、10回大会以来90余年入賞者が出ていない。しかし、今大会には大いに期待持ち越されることになった。その100㍍に出場した日本選手3人の中に、奈良市で日々活動している「鴻ノ池スポーツクラブ」の出身者がいたことはあまり知られていない。東田旺洋（あきひろ）選手、奈良市立大宮小学校、三笠中学、一条高校と歩んだ生粋の「ならっこ」中学、高校時代には、鴻ノ池陸上競技場をホームグラウンドにして練習に励んできた。

8月3日の夕刻に始まった予選レース、身近なオリンピック選手を応援するため、奈良市役所にパブリックビューイングが設置され、会場には奈良市長はじめ200人を超える関係者がバルーンをたたいて応援、第1組に出場した東田選手は頑張った。結果は10秒19で5着、決勝進出はかなわなかったが、歴史に残る一頁を刻んでくれた。

1964(昭和39)年第18回オリンピックが東京で開催された年、筆者は三笠中学から一条高校に転勤、陸上競技部の顧問として放課後は、ほぼ毎日生徒とともに汗を流した。11年間のクラブ活動は今でもよみがえる。それから50年の歳月が流れて、同校からオリンピックに出場する選手の誕生は、夢を見ているようであった。

パリのオリンピックが閉幕し、まだ猛暑が続く夏の終わり。一条高校陸上競技部に在籍した仲間が集う「いちいの会」が開かれ、後輩の活躍をたたえて祝杯を挙げた。おいしかったビールの味は忘れられない。その後10月初旬に東田選手が、鴻ノ池陸上競技場に元気な姿を見せてくれた。応援してくれたお礼にと、クラブの仲間と集合写真に納まった。

パリオリンピック男子100㍍に日本代表として出場した東田旺洋選手（中央）を囲んで記念撮影。右から2人目が筆者＝鴻ノ池陸上競技場

＝第4土曜日掲載＝